
宿命を背負いし者

幻 透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宿命を背負いし者

【コード】

N0969X

【作者名】

幻透

【あらすじ】

謎解きっぽいものを加えた、中学生の成長だったり、何やらを描いたストーリーです。

（前書き）

この話は私がまだ小説を書き始めてまだ日が浅い時の作品です。なので、至らぬ点だらけですがご勘弁下さい。あと、この話は「推理」と一応させて頂きましたが、正直、微妙です。それを理解した上でお読み下さい。

○

人間には色々なタイプがいる。貧しい家庭に生まれ、過酷な環境で生活していく者。普通の家庭に生まれ、普通に生活していく者。裕福な家庭に生まれ、穏やかな生活を送る者。

そして如何なる環境下でも存在する天才、「エース(ace)」という存在もいる。また、これらのどのタイプにも属さないし、若しくは属する存在がある。それは切り札、「ジョーカー(joker)」という存在がいる。ここに挙げた以外にも色々なタイプはいるが、共通して言えることが、普段、私たちが意識をしていないだけで、そのタイプ別の役割をしつかり守っていることがほとんどだということだ。

3

—

中学三年生の夏休み、八月に入ったばかりの今日、僕こと岸平^{きしへいし}氏は図書館に来ていた。まあ正確に言えば、図書館の前なのだが。ここでクラスメイトであり、幼馴染みの太田^{おおた}金と姫野^{ひめの}玖院^{くいん}と待ち合わせをしている。約束の時間は十二時だが、僕は三十分前に来た。というよりは来なければいけなかった。何故なら、昔からこの二人には頭が上がらないのだ。金と玖院は家柄も良く、容姿端麗、性格や能力といった面では多少難があるが、それでも一般平均よりは優れ

ている。それに比べて俺は、普通の家庭に生まれ、成績は平均、運動能力も一般男子中学生並、容姿もどこにでもいる中学生だ。こんな俺が少なからず幼馴染みである金と玖院に劣等感を抱いてしまうのは致し方がないことだと思う。まあ今やそんな劣等感にも慣れてしまったのだが。……慣れちゃ駄目だる俺。

色々考えているうちに時刻は十二時、約束の時間になっていた。だがまだ二人は来ない。いつものことだ。これがさつき性格に多少難があるといった一つである。裕福な生まれをしている二人は待たされたことがほとんどないので、いつも先に人が待っていると思っている節がある。なので、待ち合わせ時間に少し遅れようが関係ないと思っっているようだ。しかも、先に人が待っていないと不機嫌になるので、俺も待ち合わせ時間より早くに来たのだ。二人は常識はあるので、別に本人たちには悪気がなく、癖みたいなものになっているのだ。俺もその癖を直すように言っではいるのだが、やはり癖はなかなか直らないようだ。

待ち合わせ時間から三十分が過ぎたところで「よあ」という聞き覚えのある声がした。

「もういたのか。早いな」

「本当、いつも律儀ね」

やはり悪びれる様子も無く、平然と太田金と姫野玖院は話しかけてきた。金は青と白のボーダーのポロシャツにシルバーのネクタイを締め、白の短パンにゴールドのいかついバックルのベルトをしている。玖院は夏らしく花柄のワンピースを着ている。

「早くもないし、こういうことは律儀とは言わないし、いつも約束の時間には来いって言ってるし、今、夏だから暑いし、何なんだよー！」

待たされたことと本当に暑かったことから矢継ぎ早に言ってしまった。だが、二人は「今日、呼び出した理由は」と、気にせず話し始めた。……もうどうにでもなれ。

「今日、呼び出した理由は、夏休みの宿題をやってもらおうと思

つてな」

「断る」

「何故だ！」

「『何故だ！』じゃないだろ！むしろこっちが何でやってくれると思ったのか聞きたいくらいだよ」

「またしても悪びれる様子も無く言ってきた。……もう俺にどうしろと。」

「いや、平氏は成績が悪いからこういいうのをやって勉強したいのかと思っただけで、違うのか？」

「んなわけないだろ！宿題は自分でやるもんだし、俺は自分で勉強するからいいんだよ！それにこの会話は去年も一昨年もやったわ！」

金は「そうだったけ？」みたいな顔をして首を傾げていた。二人が来て約五分、俺はもう疲れました。

「仕方ないわね。ちゃんと自分達でやりましょう。じゃあどっかでさっさとやつちやいましょう」

「でも俺、宿題持って来てないんだけど」

「えっ、何ですよ。宿題くらい持って来なさいよ」

今日、呼び出された理由をついさつき聞いたのだから持って来ているわけないだろう、と思いながらも言っても無駄だろうから胸の内にとまっておいた。

「今から急いで家に帰って取って来るよ。家はすぐ近くだし」

二人は待たされると機嫌が悪くなるから急いで家に宿題を取りに帰ろうとしたら、金に止められた。

「その必要はない。俺たちも一緒に行く」

これは嫌な予感。恐る恐る「何で？」と聞いてみると。

「平氏の家でやるっ」

「やっぱり。こうなるか。別に家に入れるのが嫌なわけではないんだが、どうしても二人と俺の環境の差が露見してしまう気がするの嫌だった。だけど確かに俺の家でやれば、勉強場所を探す手間が

省けるしから楽ではあるな。幸い今日は親もないし。なので、少し抵抗はあるものの、承諾することにした。

二

図書館から歩いて十分の所にある住宅街に俺の家はある。何の面白みも無い普通の一軒家だ。図書館から家に行くまでの時間は他愛も無い会話をし、家に着き、俺の部屋に着いてからは俺の部屋の中を詮索された。しかも勝手に漁ったくせにたった一言「特に面白いものないね」と言っただけだった。勝手に漁っというそれはないだろう。面白味がなくて悪かったな。

「二人とも、下らないことしてないでさっさと宿題やっちゃうぞ」
金と玖院は言われなくてもといった顔をした。

俺の部屋には三人並んで勉強出来るような机がないので、三人とも少し離れて勉強をすることにした。金はベッドの上、玖院は机、俺は床。何故、俺の部屋なのに俺が一番やりづらい所で作っているんだ。まあ構わないけどな、と思い、それぞれ勉強を始めた。

夏休みの宿題は比較的少なく、国語の読書感想文と漢字練習、英語の英単語練習、数学の配布されたプリントだけである。読書感想文はさすがに本を読まないといけないので、今日はそれ以外を全て終わらせるつもりらしい。最初、読書感想文もネットで調べれば出来るんじゃない、とか言っていたけれど、それは俺が「駄目」と突っ撥ねたので諦めた。油断するとすぐにズルしようとする、本当にある意味では油断も隙もない奴等だ。

だがやはり集中してしまうとすごい。二人は一言も発することなく黙々と宿題をこなしている。この分だったら本当に今日中に二人とも宿題を終わらせられそうだな。俺も関心している場合じゃないな、と宿題に集中することにした。

時刻は十五時。宿題を始めてから約二時間が経ったところで玖院が「終わったわ」と身体を伸ばしながら言った。

「いくら何でも早くねえか？」

金は驚いた表情で言い、玖院の宿題を確認してみた。俺も確認してみたがやはり終わっていた。

「私が集中すればこんなもんよ」

玖院は鼻高々に言い放った。すると金は「ちょっと待て」と玖院に問い詰めた。

「……お前、漢字練習と英単語練習途中までやってたろ」

「えっ、何言ってるのよ。私がやって来るわけないじゃない」

少し動揺している玖院。

「だってこの字から明らかに字の太さや濃さが変わってるじゃん。これは時間を空けて書いた証拠だよ。ただ単にシャーペンの角度を変えただけだったらこうはならないよ」

玖院は凶星を指されたようで顔を歪ませた。

「そうよ。やってきたわよ。今年は宿題自分でやるうと思ったの。

そうすれば金も平氏も困るでしょ？」

平氏と金は顔を見合わせて恐る恐る「何で？」と尋ねてみた。

「金はどうせ平氏に頼んで断られるのが目に見えてたし、そうすると去年、一昨年だと三人でやるか私と二人でやることになるじゃない。金と平氏二人だとすぐ遊んじゃうからね。それに金は一人だと間違いなくやらないし。平氏は私たちがいないとわからない問題とかあるでしょ。わからないところを大体聞くのが私だから私が先に宿題終わってるって聞けないもんね。私は聞いても教えてあげないから」

反論の余地がなかった。玖院の正論に俺たちは太刀打ち出来ないので話を変えることにした。

「最近。失踪事件が増えてるのって知ってる？」

「そういえばニュースで騒がれてたわね。でもここら辺じゃないから私たちは安全そうね」

「一概にそうとも言えないんじゃないかな。確かにここら辺じゃ起きてないけど、失踪事件が起きてるのって特定の場所に集中してるんじゃないかって、色んな所に拡散して起きてるからここら辺も危ないかもよ」

玖院は「びびってるの？」と茶化すように言ったので俺は「誰が」と極力動揺しないように返事した。……本当は少しびびっているけど。

「はん、世の中も物騒になったもんだぜ。いや、昔から物騒ではあったけど、最近は昔と違って小さな事件でも騒がれるようになったからそう感じるだけか」

金はとても中学三年生とは思えない大人びたようなセリフを言った。

「それにこの事件は小学生から高校生までの学生で、尚且つ、仲良しグループを狙われてるらしいね」

「仲良しグループってのは具体的にどのくらいの人数だ？」

「それも結構バラバラで、少ないと二人だし、多いと十人くらいってニュースでは言ってたかな」

それを聞いた玖院が「じゃあ私たちも危ないかもね」と不吉なことを言うので、俺は「大丈夫、大丈夫」と根拠のないことを口走った。

「それにしてもその失踪事件って何が原因なんだろうな」

「ニュースでは連続誘拐事件だ、って言ってたけどどうなんだろう？」

「まあその線が有力よね。こんな連続で失踪事件が起きておいて事故ってことはないでしょうし、超常現象なんて非科学的なものでもないでしょうしね」

「誘拐だとしたら目的はなんなんだろうね？ 身代金を要求しているわけでもないし、というか犯人から何の音沙汰もないってのは不思議だよな」

「確かに。まあ犯罪者の気持ちなんかわからんさ」

そう言うと金はベッドの上で寝転んでしまった。……大分話が逸れたが宿題やれよ。

時刻は十六時を回っていた。親が十七時には帰って来てしまうので、ここらが解散時だろう、と思い、その旨を金と玖院に伝え、「もう帰った方がいいんじゃない？」と促した。

「もうそんな時間か。宿題はまだ終わってないからまた今度一緒にやろうぜ」

「えー、私はもう終わってるんだけど」

「お前は裏切った罰だから強制だよ」

玖院は渋々了承してくれた。良かった、俺もわからない問題があったから聞きたかったし、丁度良いや。

「じゃあ、二人とも家まで送るよ」

「あ？別にそんなことしなくてもいいぞ」

金は不思議そうな顔で言ったが、俺は引かない。

「ほら、さつき言った失踪事件のこともあるし、二人とも裕福な家の子なんだから危険かもよ」

「誘拐は金目的じゃない可能性の方が高いんだろ？大丈夫だよ」さらに玖院までもが畳み掛けて来る。

「それに仲良しグループを狙うなら三人で行動する方が危ないんじゃないの？」

「確かに二人の言ってることはもっともだけど、……俺だったら不審者が来ても退治出来るよ。ほら、俺って格闘だけだったら二人よりも得意だし」

そう、俺が唯一、二人に勝てるのが格闘系なのである。小さい頃から格闘技系が好きだったため、真似事ばかりしていた賜物だろう。「まあちよつと格闘技かじった程度の中学生でどうにかなると思えないけど、そこまで言うなら一緒に行きましょう」

ようやく諦めたらしく二人とも不本意ながら承諾してくれた。本当は俺のことが心配で言ってくれてるのはわかってているが、これは何故か譲れなかった。

二人は帰る支度をし、俺も出掛ける準備をした。

外に出ると、今は夏なので外はまだ明るかった。二人の家は住宅街の少し外れにあるので自然と人が少ない道を通ることになる。三人でいつも使っている道を通っているが、この時間でも人通りが全くない。道の脇に車が一台止まっているだけである。

すると突如玖院が「くっ」と声を上げて倒れてしまった。俺は「どうして!」と声をかけようとした時、後ろに人の気配がした。振り向くとスーツを着た人物がいて、俺に何かスプレーみたいな物を吹きかけてきた。不意を突かれた俺は避けきれず、喰らってしまった。それを見た金がスプレーを奪おうとしたが、金もスプレーを喰らってしまった。

「これは催眠スプレーか」

どンドン眠気が襲って来てしまい、俺と金は意識を落とした。

三

「。 氏。平氏!」

俺を呼ぶ声がある。目を開けてみるとそこには金と玖院がいた。

俺はまだ頭がぼーっとする中、「ここは?」と聞いてみた。

「わからない。唯一わかることはどうやら俺たちは誘拐されたらしい」

「誘拐! まさか本当に巻き込まれるなんて……」

確かに少しは杞憂していたが半分は冗談のつもりだったのに。

「まあ誘拐されちゃったものはしょうがないわ。これからどうするか考えましょう」

やっぱり女の方が肝が据わっているのだろうか。俺と金が今だに動揺しているのに、もう今後の方に考えが向かいつている。

俺は「それもそうだね」と言つて、周りを見渡した。一面がコン

クリートで出来ている。鉄の扉が一つだけあり、部屋の上部にカラオケボックスにあるようなスピーカーが一つだけある。

「閉じ込められてるようだね」

「そんなの見ればわかるわよ。……抜け出せそうな所はこの扉しかなさそうね」

三人は扉の所に集まった。

「これは……電子錠ってやつか」

俺も扉の方をよく見てみると、確かにデジタル式の鍵になっていた。近くに数字や文字を打ち込むキーボードがある。

「どうやら暗証番号を入力すれば開くようね」

玖院はキーボードをカタカタと打ち始めた。そうすると扉に付いていたモニターに『開けゴマ』と表示され、玖院がエンターを押すとモニターに『Error』と表示された。玖院、今時『開けゴマ』って……。

「やつぱり駄目ね」

「はっはっはー。駄目だよそれじゃー。もつと頭使わなきゃ突如スピーカーから声が流れてきた。」

三人はスピーカーの方に顔を向けた。

「君たちの行動はこのスピーカーに付いている小型カメラで見えたよ。随分面白いことするねー。ノーヒントで挑戦とか、すごすぎるよ」

「じゃあこの暗証番号を解くヒントくらいよこしなさいよ」

玖院はいきなり現れた声の主に恐れもせず勇敢に立ち向かった。

男の俺たちは本当に情けないな。女……恐るべし。

「ヒント？ そんなものないよ。あたしから言えることはヒントなんかなくても解けるってことくらいかな」

「きやははは」と人を馬鹿にしたような笑い方をするやつだ。会話するのも嫌なタイプの人間っぽいけど、ここで聞けることは聞いておこうと思えば、俺は質問を投げかけた。

「お前が誘拐犯なのか」

「あたし？ あたしじゃないよ。攫って来たのは別の人であたしはここで馬鹿な子を見る役目」

「ってことは複数犯か」

「そうに決まってるじゃん。あたしが攫って来てないって言うてるのに、単独犯なわけないじゃない」

「いちいち癪に障る言い方だ。だが、情報は引き出せているのだからここはグツと堪えることにした。」

「何が目的だ。今まで攫って来た人はどこにいる」

「目的？ それは遊ぶためだよ。君たちみたいなき供を連れて来て、こつこつと難題を押し付けて解けない無様な姿を嘲ることだよ。攫って来た子たちがどこにいるかはあたしは知らないね」

心底腹が立つ。そんな下らない理由で誘拐し、拳銃の果てに、攫った子がどこにいるか知らないだと。ふざけるのも大概にしゃがれ……とは思うが、玖院のようにここで熱くなっても仕方が無い。今は耐える時だ。

「お前に聞いても無駄そうだな。詳しいことはここを出て、他の奴に聞くことにするよ」

「そうしてくれるとあたしも助かるわー。いい加減、馬鹿の話し相手も疲れたことだったし」

プーチン。もう我慢の限界だ。向こうがガキみたいなことを言っているのは頭ではわかっている。だけど、こつこつと中学三年生のがキだ。これ以上馬鹿馬鹿言われて黙っていられない。俺は冷静さを失い、質問ではなく、ありつたけの文句を言おうとした時、金が俺の方にポンと手を置き、「落ち着け、後は俺に任せろ」と言ってくれた。それで冷静さを取り戻した俺は、金に全てを任せることにした。

「少し話を戻させてもらうが、最初お前はノーヒントで挑戦が馬鹿みたいに言ったにも関わらず、ヒントをくれと言ったらそんなものはないと言ったな。それだと話が矛盾してないか？ ヒントがないなら最初に馬鹿にしたのはおかしいし、ヒントがあるなら最初に

馬鹿にしたことを考えるとヒントがないと解けない問題だってことじゃないのか？」

「あはっ、ばれたか。もう早くそこ突っ込んでくれないからいつ話そうかヒヤヒヤしたじゃない。まっ、あんたはさっきまで話してた馬鹿ガキよりはマシそうね」

この野郎、いちいち人を馬鹿にしやがって。俺は思わず齒軋りをしてしまい、金に「だから落ち着けての」と頭を小突かれてしまった。反省反省。

「それで、ヒントは何なんだ？」

「ヒントは……ありませーん」

俺と金は揃って「なっ！」と驚きを隠しきれなかった。

「おい、待てよ。それじゃあおかしいだろ！」

「？ 何もおかしくないよ。おかしいのは君たちの頭くらいじゃない？」

声の主は「きゃははは」と笑いだした。……こいつ、どこまで人を馬鹿にすれば気が済むんだ。

「……お前、どこかで嘘をついてないか？」

「嘘？ 嘘なんかついてないよ。これは約束する。だってゲームで嘘をついたら面白くななくなっちゃうじゃん」

こっちはゲームなんかじゃなく、命懸けなのに呑気なことを言いやがる。

「じゃあヒントがないってどういうことなんだ？」

「あーもう、まだわかんないかなー。しょうがない、出血大サービスだからね。ヒントがないってのが最大のヒントで、さらに言えば、君たちは今ヒントの渦中にいる」

俺と金は頭の上に「？」が無数に飛び交っているようだ。しかし、ここまで沈黙していた玖院が「わかったわ」と一人納得していた。

「その女の子は理解したようだね。良かったよ。それと、君たちが答えを入力出来る回数は一人一回だからね。だからその女の子はもう入力出来ないよ。それとこれはサービスだけど、全て平仮名

入力でOKにしてあげるよ。漢字変換とかまで合わせるとか言ったら難易度高すぎだしねー。相談は三人で出来るんだから頑張つてね。じゃあ君たちが悩んでるのを高みの見物とさせてもらおうよ。あつ、最後に一つ朗報。ここに連れて来られたのは君たちだけじゃないよ」

声の主は「じゃあね〜」と言って音声途絶えた。本当、最初から最後までムカつく奴だ。会えたらぶん殴つてやる。

しばらくの間、沈黙が流れたがそれを金が打ち破った。

「玖院、お前は奴のヒントの意味がわかってみたいだが、どういふことなんだ？」

俺も聞きたかったことだ。俺と金が理解していないのに玖院は何かを掴んでいたらしい。玖院は難しそうな顔をしてゆっくりと口を開いた。

「……合っているかどうかわからないんだけど、多分、ヒントがないのがヒントって言うのはさ、ヒントじゃなくてももう既に答えが出ているけど、私たちが気付いてないだけなのかもしれないわ。それに、ヒントの渦中にいるって言うのは、今、私たちが置かれているこの状況こそがヒントなんじゃないかしら」

いつもより歯切れが悪かったが、確かに言いたいことは伝わったし、「なるほど」と関心出来ることであつた。だが、まだ決定打が足りない。すると、金がグルグルと歩き回りながら、言った。

「玖院、合ってるかは別として、お前は何か答えが出ているか？」

玖院は無言で首を横に振った。それを見て金は「そうか」と言い黙ってしまった。また沈黙が流れてしまったので俺は一気に聞きたいことを引き出しておくことにした。

「玖院は俺たちが今ヒントの渦中にいるって言ったけど、具体的には何がヒントだと思ってるの？」

玖院は困った顔をしたけれど、大きく息を吐いて気を引き締めてから答えてくれた。

「……ちよつと文章にすると説明出来ないから断片的に言つね。

私は、ここが密室であること、私たち三人しかいないということ、これがヒントだと思ふの」

確かに。今俺たちが置かれている状況にピッタリだ。細かく言えばもつとあるだろうが、大まかな点はこれだろう。だとすれば、このヒントの中に暗号が隠されていることになる。

「先に言つたもう答えが出ている説よりこつちの方が信憑性がありそうだね」

「そうね。とりあえず最初の方は考えないようにしましょう」

それから三人はそれぞれ思考モードに入った。俺と玖院は扉の前でモニターを見つめながら、金は歩き回りながら思考している。

ここが密室であることは間違いないし、俺たち三人しかいないつていうのも間違いない。問題はこれがどんなヒントで、どんな答えが導き出せるか、だが、何も良い案が出てこない。密室？ 三人しかいない？ だからどうしたつていうんだ。こんなものただの中学生である俺に解けるわけないだろ。探偵とか警察とか推理作家でも呼んで来いってんだ。っと、投げやりになつてはいけない。ここに来てからというものの冷静さを欠き過ぎている。こんな状況なのだから当然かもしれないが、他の二人は中身はどうか知らないが、外見は冷静さを保っている。こんな時でも關心してしまふな。この二人なら、ただの中学生じゃないからこの問題を解いてくれるんじゃないかと期待を大きくしてしまう。いけないいけない。二人に頼りつきりは駄目だ。俺も考えないと。そう思い、邪念を払つて、もう一回思考し直した。

四

……俺たちがここに連れて来られてからどれくらいの時間が経つたのだろう。そもそもここで目を覚ますまでのくらいの時間が経

っていたのだらう。日付はもう変わってしまったのか。だとしたら、俺たちの親は心配しているのだらう。「失踪事件が起きた！」などと言って騒いでいるのか。だとしたら、いや、でなくとも早く脱出しなければ。……わかつているのに雑念がー！

やはり駄目だった。俺には解けぬ難問らしい。ついさつき、雑念を払って思考すると思っただけばかりなのにもう違うことを考えている。……これは本格的に二人に任せられないかもな、と思った矢先、今まで歩き回っていた金が俺と玖院の近くに寄り、足を止めた。「合っているかはわからないが、一応、筋道の通っている答えは導き出せた」

「奇遇ね。私もちょっと考えたことがあるの」

さすがはこの二人。ただのボンボンの子供じゃないぜ、と俺は関心しながらも、何の答えも出せない自分を恥ずかしく思った。だが、今恥じていてもしょうがない。俺は二人の推理を聞き入ることにした。答えは俺と金が一回ずつしか入力出来ない。だからここで俺も少しでも役に立たなければ、もう出られなくなってしまいかもかもしれない。

「玖院もか。……まず俺の考えから言ってもいいか？」

玖院は「どうぞ」と言っただけで金に順番を譲った。

金は「悪いな」と言い、咳払いをし、呼吸を整えてから話し始めた。

「スピーカーの声の主はこう言ったな。『ヒントがないってのが最大のヒント』と」

俺と玖院は頷いた。

「俺はこの文章をこういう風に解釈したんだ。『ヒントがない』という文章の並び順を変えて『ひとがないん』にする。これを変換すると『人がナイン（九）』という文章になる」

『ヒトガナイン』『ひとがないん』『人がないん』『人がナイン』

本当だ！ 下らない言葉遊びではあるけれど、十分筋は通っている。

俺は驚いたけれど、玖院はまた頷くだけだった。どうやら玖院も同じ考えだったらしい。これは信憑性が有りそうだ。続けて金ももう一つのヒントについて述べる。

「次に『ヒントの渦中にある』って言うのはだな、密室で三人しかいないということがヒントになり、先のヒント『人がナイン（九）』の意味が『密室に九人』という意味だとしたら、その『九』という数字を俺たちの人数『三』に変えればいいのではないかと思う。だから、俺の答えは『人が三』だと思う」

これまたこじつけである気はするけど、確かにそのようにも読み取れる。やっぱり金はすごいな、と関心していると、玖院は「……私と答えが違う」と呟いた。

「玖院は俺と答えが違うのか。じゃあ今度は玖院の答えを聞かせてくれ」

金は黙り、玖院の方を見つめた。俺も聞き逃さないように玖院を凝視した。

「私の答えは、最初のヒントの方は金と一緒によ」

玖院はここで一回間を空けた。落ち着いて言葉を選んでいるようだ。下を向き、何やらブツブツと呟きながら慎重に言葉を選び、まとめている。そして、呟きが終わり、顔を上げ、俺と金の顔を見た。ここからはノンストップで玖院は話し始めた。

「私は二つ目のヒントをこう解釈したの。『ヒントの渦中にある』というのは密室に私たち三人だけしかない、ここまでの解釈は金と一緒に。違うのはここから。金は最初のヒント『人がナイン（九）』の数字を私たちの人数、つまり、『三』に変えると言ったけど、私は密室に私たち三人だけしかない、がヒントではなく、三人以外人がいない、というのがヒントなんじゃないかと思うの。つまり、『人がいない』ということから最初のヒントの『人がナイン』の『人が』を取って『ナイン』にする。これが私の答えよ」

俺は玖院の推理を聞き、確かにこういう解釈も出来るな、と思っただ。これではどちらが正解なのか、又はどちらも違うのかわからな

い。……やっぱり俺にはこういった才能はないのか。

「もうこれ以上悩んでもしょうがない。俺と玖院の答えを入力しちまおうぜ」

そう言っつてキーボードの前に立ち、カタカタと打ち始めた。……

この決断力の良さも俺とは違うところだな。

金は『ひとがさん』と入力し、エンターを押した。モニターには『Error』と表示された。

「駄目か……よし、平氏、玖院の言っつた答えを入力してみろ」

既に入力してしまった玖院の代わりに俺が入力することになった。『ないん』と入力をし、エンターを押した。モニターには『Error』と表示された。

三人は答えられる限界数の三回を全て答えてしまった。しかも正解ならず。これにより、俺たちは外に出られるチャンスを失ってしまった。言葉を失い、沈黙が流れた。すると、この沈黙を破るようにスピーカーから声が流れて来た。

「あゝあ、不正解かー。残念。君たちなら解けると思っつたんだけどな」

前と変わらず、不快な喋り方で言う。金はスピーカーに向かって質問した。

「俺たちは答えられなかつたわけだが、どうなるんだ？」

「当然、そこからは出られないよー。まっ、出られる可能性が全くないっつていうわけではないんだけど、確率は宝くじで一等が当たるより低いだろうしねー」

玖院が質問する。

「それはどういふことかしら？」

「さつきも言っつたけど、君たち以外にもここに連れて来られてるの。そいつらがこの部屋に気付けば出られるかもよ。この部屋は外からは簡単に開くし」

要領を得ないな、と俺が考えていると玖院もそう思っつたらしく、ここから畳み掛けるように言っつた。

「その私たち以外にここに連れて来られた人はどこにいるの？ 私たちの近くにいますの？ その人は私たちがここに居ることを知ってるの？」

「あー、そんなに矢継ぎ早に質問しないでよー」
困ったような声で言う。少し間を空けてから話し始めた。

「……君たち以外の人、いや、複数だから人たちは君たちと半径百メートル以内くらいにはいるんじゃないかな。君たち以外の人も自分たち以外の人と一緒に連れて来られたことを知ってるよ」
まだ玖院は止まらない。

「私たち以外の人は今何をしてるの？」

スピーカーからの声の主も躊躇わず答えていく。

「君たちと同じでゲームしてるよー」

「その人たちはクリア出来たの？」

「さあ？ それはわからないよ。あたしが全員を見てるわけじゃないんだしねー」

「……そう、わかったわ」

それっきり玖院は黙ってしまった。質問はこれで終わりらしい。

俺も金も聞きたいことは全て玖院が聞いてしまったので黙っていた。
「……もう言いたいことはないみたいだねー。それじゃああたしもこれにてさよならするねー。まあせいぜい助けが来ることを祈ってなー」

そう言うと、スピーカーからの音声は途絶えてしまった。

五

取り残された俺たち三人。本当にこのままここから出られないのだろうか。そうになると、外では俺たち三人は失踪事件として扱われるのだろうか。その時両親や学校の友達はどう思うのだろうか。金も

玖院も黙ってしまっている。俺たちはここで死んでしまうのか。

そんなのは嫌だ

俺は扉の前を離れ、スピーカーの下に行き、金に「ちょっと来て」と言い、スピーカーの下に来てもらった。

「何だ？」

「俺が台になるから上にあるスピーカーを取り外してほしい」

金は不思議そうな顔をしたが、俺が「頼む」と言うとは仕方なさそうではあるが、取りかかってくれた。取り外すのは難しかったらしく、取り外すというよりは取り壊す形にはなったが、どうにか天井から取り外すことには成功した。

俺は金に「ありがとう」と言い、スピーカーを持って扉の前に向かった。そして、扉の前にいた玖院に「ちょっと離れてて」と言い、扉の近くから遠ざけた。

そして、俺はスピーカーを扉に向かって叩きつけた！

ガングガングと何度も叩きつける。それを見た金と玖院が驚きのあまり、声を出せずにただ見ている。俺は二人の視線を気にせず、叩き続ける。扉に付いているモニターが壊れ、扉がへこみ、スピーカーの破片が周りに散乱する。

ガングガングガング、と音を立て叩き続ける。それを見ていた金は俺が意図していることに気付き、ベルトを外し、利き腕である右手の拳にバツクルが来るように巻きつけ、俺の左側に立った。俺は金を見て、お互いアイコンタクトを取った。そして、俺と金は交互に扉を殴り始めた。ガングバングと音を立てて叩き続けた。叩く叩く叩く、歪む歪む歪む。俺と金は汗が噴き出す。疲労も溜まって来たが叩き続ける。

もうどのくらい叩き続けたらだろうか、ようやく光明が差した。扉が開いた、というか壊した。俺はもうボロボロになったスピーカーを、金は同じくボロボロになったベルトを投げ捨てた。疲れてしまった俺と金はその場に座りこんだ。そして、金が「無茶するなあ」と言い、俺は「ははっ」と、力なく笑ってしまった。それを見てい

た玖院が「これだから男の子は」と、ここに閉じ込められてから見てなかった笑顔をした。

六

俺たち三人は少し休憩をしてから部屋を出た。金は壊れてしまったベルトを部屋に置いて来たので、短パンが少し緩そうに見えるが、ずり落ちる心配は無さそうだ。

部屋を出ると、そこはコンクリートに囲まれた一本道になっており、奥に上り階段が見える。俺たちはその階段を上り、上りきった所にある扉を開けて中に入った。そこには人が三人いた。そのうちの二人は俺たちと同じクラスの、越智零おち ぜいさんと南波一君なんば ひとしである。…もう一人は誰だろう？

「よお、お前らだったのか、他に連れて来られた人たちってのは来るのが遅いから待ちくたびれちゃったぜ」

いつも通り、こんな変な所に連れて来られたのを何とも思っていないかのように南波君は話しかけて来た。越智さんも何かを言ったように見えたけど、恥ずかしがり屋で大人しい性格なので大きな声が出せず、俺たちにははつきりと聞こえなかった。

「こつちこそ、まさか連れて来られてるのがお前らだとは思わなかったよ。……で、そこにいる子は誰？」

金は俺たちが知らない残りの一人を指して言った。

「ああ、この子は転校生。夏休み明けからうちの学校に、それもうちのクラスに来る馬場切代ばば せつよさんだよ」

名前だけ聞くと、何とも昭和臭い感じがするが実際は今時の女の子といった感じである。チャラチャラしているわけでもなく、真面目そうで、元気もある女の子である。俺たちは転校生か！と驚きつつも「よろしく」と声をかけ、馬場さんも「こちらこそ」と笑顔

で返してくれた。

俺たちは挨拶もそこそこに、ここに連れて来られてから合流するまでの経緯を簡単に話し合った。

「お前らもあの電子錠のパスワードを解いたんだよな？」

話を聞く限り、どうやらパスワードの答えは一緒らしかった。しかも、スピーカーから流れる声の主も一緒らしい。……あの野郎、いかにも「あたし知りません」みたいな言い方していたくせに知ってたんじゃないかよ。

「ああ、僕たちも解いたよ。あれは簡単だったね。金たちは何でそんなに時間がかかったの？」

南波君は見た目は中々ガツチリしているのに一人称が「僕」という何とも似付かわない言葉を使っている。南波君は成績優秀、スポーツ万能の文武両道の天才と呼ばれているが、それを鼻に掛けないし、一人称が「僕」というのも会話の中で傲慢な印象を抱かなくなる要因の一つなので、人気もある。……羨ましい。

「いや、俺たちはパスワードが解けなかったんだ。……それで、その、……扉を、ぶっ壊してここまで来たんだ」

歯切れが悪く金が言つと、俺と玖院も恥ずかしくなって顔を伏せてしまった。

「壊したって、……無茶するな」

向こうの三人は驚いた様子であった。……当たり前だよな。

「じゃああのパスワードの答えはなんなんだよ」

金も恥ずかしいようで、恥ずかしさを紛らわすように質問した。

「ああ、あれの答えは『何もなし』だよ」

俺たちは「！」と、エクスクラメーションマークが頭の上を飛び交うように驚いた。

「えっ、それは『なににもなし』と入力すれば良かったの？」

玖院が質問すると、南波君は「違うよ」と首を横に振った。

「あれは何も入力しないでエンターを押す、それが正解だよ」

答えは至極単純であった。俺たちが（と言つても俺は何もしてい

ないが）試行錯誤して出した答えなど検討違いではないか。……にしてもどうやってその答えに至ったのか気になったので、南波君に聞いてみた。

「ああ、それも単純なことだよ。ヒントが『ヒントがない』と『ヒントの渦中にいる』だったよね？ それで『ヒントがない』のが最大のヒントって言ってたじゃん？ 『ヒントがない』のが最大のヒントになる問題なんてこの世には存在しないわけだよ。つまり、『ヒントがない』って時点で問題になってないんだよ。ってことは最初からあの電子錠のパスワードは問題になっていなかったんだ。あれは問題になっていないのが最大の問題だったって言うていいのかな」

南波君の説明を聞いた俺たちは啞然としながらも納得し、悔しかった。答えを聞いてしまえば単純な、少し考えれば答えに至りそうなものであった。……その少しの差が凡人と天才を分けるんだろうな。

それから俺たちが導き出した誤答に行き着いた経緯や扉をぶっ壊した経緯など、不名誉なことを話してここまでの話を終わらした。

……あー恥ずかしい。

そして、今後について話し合うことにした。

七

「これからどうしようか？」

南波君が質問を投げかけると全員、思考を巡らせた。だが、金がすぐに口を開いた。

「ここにもいってしまうが、とりあえず、あの扉の奥に行こうぜ」

金は俺たち三人と南波君たち三人が入って来た扉がある方向では

なく、その反対側にある扉を指差した。この部屋には扉がその三つしかなく、他には何も無い。さっきまで居た部屋と同じく、コンクリートで囲まれた部屋である。さっきの部屋にあったスピーカーもない。……まあ今となってはスピーカーも残骸になっているけど、金が言ったことに全員同意し、その扉の中に入って行った。その扉は特に鍵がしてあるわけでもなかった。すんなりと開いた。扉の奥はまた一本道となっており、俺たちはひたすら前に進んだ。程なくしてまた扉があった。金が「開けるぞ」と言うので、全員コクリと頷いた。その部屋には一人、男が立っていた。

「ようこそ、ここまで全員でいらっしやいました。中へお入り下さい」

その男が手招いた。俺たちも扉の前で突っ立っているわけにもいかない。中に入った。男は執事みたいな格好をしていた。全身黒尽くめで白い手袋をしている

「お前が主犯か？」

金が尋ねると、男はクスツと少し笑って言った。

「まあ主犯かって聞かれたら主犯ではありますね」

「何でこんなことしてるんだ」

「それはですね……見たいのですよ。色んなタイプの人間の行動やらなんやらを」

色んなタイプ？ 何を言っているんだ、こいつは。俺たちは誰もパツと来ていない様子にも関わらず、男は続ける。

「急に言われてわからないのも無理はありません。君たちはまだ若い。この先少しずつ気付いていくでしょう。もしかしたら薄々勘付いている人もいるかもしれませんが……それに君たちのその並び順、君たちも本能では分かっているみたいですね」

並び順？ 相変わらずこいつは何言っているんだ。今の並び順は二列になっている。左側前から、玖院、馬場さん、越智さん。右側前から、金、南波君、俺、である。これが何だと言うのだ。まあ金と玖院が先頭に行くのは確かに必然っぽいけど。

「……で、俺たちは家に帰りたいんだが、どうすれば帰れるんだ？ それともここから出しません、なんてこと言っくんじゃないだらうな」

金が言うと「まさか」と言って男が笑った。

「いやいや、ちゃんと帰してあげますよ」

金は続ける。

「今まで連れ去られた人たちはどうしたんだ？」

「その人たちはちゃんと帰らせましたよ。なんか世間では失踪しているみたいな感じになっているようですが、それはわたくしが知るところではありません」

いかにも胡散臭い感じに男が言う。ちゃんと帰らせただって？

じゃあその人たちは何で帰って来ないんだ。金もそう感じてはいるだろうが、ここでは追求せずに次の質問にいった。

「共犯者はどこにいる？」

すると男は「共犯者ですか？」と、首を傾げながら言った。

「お前は指示を出していた主犯、つまり、親分だろ？ その他に人を攫う人や俺たちが最初に居たスピーカーの声の主とかはどこにいるんだ？」

男は「ああ、それですか」と、またしてもクスクスと笑いながら言った。

「その人たちなら別室にいますよ。もしかして、会いたいのですか？」

金は「いや、ならいい」と言って、一瞬、間を空けてから言った。「それじゃあもう俺たちは帰らせてもらっぜ。ちゃんと帰してくれるんだろ？」

そう言って、金が一步踏み出した時、男が「ちょっと待って下さい」と言って引き止めた。

「お帰りになる前に一つゲームをしていきませんか？」

金が「ゲーム？」と言うと、男は「そう、ゲーム」と言って、ポケットからトランプを出した。

「ブラックジャックをやりましょうよ」

「ブラックジャック？」金が聞くと男は「そう、ブラックジャック」と答えた。

「何で急にそんなことを……」

と戸惑いながら金が言った。

「最初に言った通り、わたくしは色んなタイプの人間の行動が見たいのです。ブラックジャックはその為の一環として考えてほしいですね。ついでに、君たちの大まかなタイプについても教えて差し上げますよ」

男は「ゲームが終わった後にね」と、付け足してニコツと笑った。

「そんなことして俺たちに何のメリットがある？」

金がそう言うと、男は「そうですね」と言っつて、少し考えた。

「じゃあこうしましょう。わたくしに勝った人は、わたくしが出来る範囲で何でも願いを叶えましょう」

男が「それでどうでしょう」と言った。俺たちは少し相談して、別にそこまで急ぐ必要も無さそうだし、ちょっと気になるという理由で、「俺たちに危害を加えなければいいですよ」と承諾した。……ここら辺が中学生たる所以の危うさだな。

男は「もちろん」と言っつて、部屋の中央に置いてあったテーブルの前に移動した。俺たちもそれに続き、男から時計周りで、金、玖院、俺、南波君、越智さん、馬場さんの順でテーブルを囲った。

男が「それでは始めましょうか」と言っつと、越智さんが消え入りそうな声で「あ、あの」と言った。男が「何ですか？」と聞くと、少しビクツとなり、一度深呼吸をしてから「私、ブラックジャックのルール知らないんですけど……」と言った。

「そうなんですか。でも大丈夫ですよ。今から専門用語などは使わず、簡単に説明しますから。それに、これは普通のブラックジャックと少しルールを変えてありますから」すると男はトランプからエースからキングまでのカードを一枚ずつ&ジョーカーを二枚取り出した。

「それではルール説明を開始します。まず始めに、通常のブラックジャックのルールはエースは一か十一、ジャック、クイーン、キングは十、その他の数字はそのままの数字として使い、ジョーカーは除外する。ですが、今回やるのは全てそのままの数字として使います。エースは一として、ジャックは十一、クイーンは十二、キングは十三、といった具合に。そして、ジョーカーも加えます」

「ジョーカーはどういった役割があるのですか」

と、ここにきて急に反応を示した馬場さんが言った。

「ジョーカーはオールマイティーカードです。つまり、何をしても許されるカードです。唯一不可能なのは一から十三以外の数字にはなれないってことですね。それ以外ならジョーカーの役割として存分に使ってください」

男の説明を聞き、馬場さんは「わかりました」と言って、お辞儀をした。……俺たちを連れ去って来た主犯に対しても礼儀正しいなんて、この子は育ちが良い子なのか、とか考えてしまった。

「それじゃあルール説明の続きをします。通常のルールではディーラーとプレイヤーに分かれるのですが、今回はそうしません。全員、ディーラーとして扱います。なので、トランプは誰かが配るのではなく、真ん中にトランプの山を置くので、自分の順番の時、最初にカードを引いた時、一枚を表に、もう一枚を裏にして自分の前に出して下さい。当然、裏にしたカードは見えない、見せないように男は疲れたのか、少し間を空けてから続けた。

「そして、通常はディーラーよりも二十一に近い人の勝ちになるのですが、今回は全員ディーラーですので、それは通じません。なので、今回の勝ちの条件は、二十一にすることのみとします。数が多くても少なくても駄目です」

「以上が今回のブラックジャックのルールです。わかりましたか？」と、男が言うと、越智さんは少し戸惑いながらも、全員、コクリと頷いた。それを見た男が「よろしい。では、始めましょう」とトランプを切り始めた。男がトランプを切り始めたのとほぼ同時に、

「あつ」と声を上げた。

「ジョーカーのことで言い忘れていたことがありました。裏のカードでジョーカーが来た時は当然表にした時しか使えません。ですが、表のカードとしてジョーカーが来た時は使うタイミングは自由とします」

「自由と言うと？」と、馬場さんが尋ねた。

「ジョーカーが来た時にジョーカーの数字を決めてもいいし、一度保留して、また新しく一枚カードを引いてもいいということです。後者の場合は、ジョーカーはあくまで保留扱いなので、終わるまでにはちゃんと使って頂くことになりますがね」

と、男が答えると、馬場さんは「わかりました」と言って、またお辞儀をした。……律儀なものだ。

「あと、誰かがスタンド、又はバーストした時点でゲームは終了。全員、その時点での数字を発表します。例えば、順番をわたくしから時計回りにした時に、わたくしがバーストしたら、最後の順番の人までカードを引いてゲーム終了、といった感じです。それでブラツクジャックになった人はゲームを抜けて、最後の一人になるまでやりましょう」

越智さんが「スタンド？ バースト？」と、いかにも私わかりません、みたいな行動を取ったので、隣に居た馬場さんが教えていた。「これで真正銘ルール説明は終わりです。さあ、始めましょう」と言つて、男はシャッフルしたトランプの山を真ん中に置いた。

さあ、ゲームの始まりだ

八

順番は男から時計回りに決まった。

一周目に引いたカードは、男から、クラブの六、スペードの二、

ダイヤの十二、ダイヤの三、ハートの十、スペードの十三、クラブの九。

ここでは誰もスタンドせずに二週目に入る。

二週目は、ハートの十一、ハートの三、クラブの二、スペードの七、クラブの十、スペードの十一、ダイヤの五。

この時点で越智さんがバーストしてしまったので、一回目はここで終了。なので、全員、ホールカードをオープンした。

その結果、全員の数字の合計は、男から、十九、十五、二十三、十二、二十一、三十六、二十二、となった。

第一ゲームでは、南波君だけが抜けられた。男が「っ」と、何か言ったような気がするけど聞こえなかった。……何と言ったのだろうか？ 隣に居た金とかなら聞こえたかもしれないから後で聞いてみようかな。

そして、すぐさま第二ゲーム開始。

一周目は男から南波君を抜いた順番で、クラブの二、スペードの六、ハートの四、スペードの十、ハートの十、ダイヤの七。

誰もスタンドしないので二週目へ。

二週目は、ハートの八、スペードの二、クラブの五、ダイヤの一、ダイヤの十二、ハートの六。

またしてもこの時点で越智さんがバーストしてしまったので、二回目終了。全員、ホールカードをオープンした。

結果は、男から、十九、二十一、二十一、十六、三十三、十六、となった。

第二ゲームでは、金と玖院が抜けられた。

そして、第三ゲーム開始。

一周目は先程のメンバーから金と玖院を抜いた順番で、クラブの七、ハートの十二、ダイヤの十一、スペードの一、

誰もスタンドしないので二週目へ。

二週目は、スペードの十、ダイヤの六、クラブの十、ハートの四。ここでもまた越智さんのバーストが決定したので、三回目終了。

全員、ホールカードをオープンした。

結果は、男から、十九、二十一、三十、九、となった。

第三ゲームでは、俺だけが抜けられた。

「うーん、なかなかハイペースで抜けていきますね。わたくし、少々驚いていますよ」

男はトランプを集めながらそう言うが、その言葉とは裏腹に、あまり驚いたようには見えない。何を考えているんだ？

俺と金、玖院、それに南波君は抜け出せたので、傍観者に回っている。残っているのは、男、越智さん、馬場さんの三人。このゲームはほとんど運で勝敗が決まるようなもので、越智さん、馬場さんが抜けるのと男が抜ける確率は五分のはず。別に負けても問題無さそうなことを男は言っていたが、信用ならないので、早く抜けることに越したことはないだろう。だが、越智さんが三回連続で二周目でバーストしてしまっているのが気がかりだが心配していてもしょうがないだろう。それに三回連続バーストしているならそろそろ運が向いて来るかもしれない。それと、まだジョーカーが出ていない。まあ二枚しか入っていないのだから出にくいんだろうな。：それはそうと、一回目のゲームが終わった時、男がボソツと言ったことはなんなんだろう？ 確認してみよう。

そう思い、俺は南波君と玖院の間に居る金に話しかけようと、玖院に「ちよつと間失礼するよ」と言っつて金と玖院の間に入り、金に話しかけた。

「一回目のゲームが終わった時、あの男何か言っつてなかったか？」

「ん？ ああ、そういえば何か言っつたな。確か『やつぱり』っつて言っつてた気がする」

「『やつぱり』？ どういうことだろう？」

「さあな。それよりも始まるみたいだから見てようぜ」

『やつぱり』とはどういう意味なのだろう。あの男には南波君が抜けることが分かっていたような口振りだ。……もしかしてあの男は本当に分かっていたのか？ 仮に分かっていたとしたらどうやっ

て？ ……………俺に考えられることは、あの男がイカサマをしていることしか考えられない。だが、イカサマをした気配はない。……駄目だ、わからない。

そうこうしているうちに、男がカードを配ろうとしていた。それを見た俺は「待った！」と叫んだ。

「何ですか？ いきなり大声を出して？」

男がさっきとは違い、本当に驚いたように言った。俺は「俺がトランプを配る」と言っ、男に向かって右手を出した。男は「そういうことですか」と言っ、すんなりと渡してくれた。俺はトランプを受け取り、表にしてカードの枚数を確認した。

「…………ああ、わたくしがイカサマをしていないかの確認ですか。いいでしょう。わたくしが用意したトランプを怪しむのは当然です」全然慌てる様子のない男。構わず確認する俺。…………他の奴等は呆然としているんだろ。カードに細工をしていないし、枚数も合っていることを確認した俺はトランプをシャッフルして二枚ずつ配ってテーブルの中央にトランプの山を置いた。

「問題はなかったですか？」

と、男が不敵な笑みを浮かべながら聞いて来た。俺は「ああ」と素っ気無く答えた。金と玖院が「どうした？」と聞いて来たので、俺は「いや、何でもなしよ」と言っ、テーブルの方を見据えた。

少し時間が掛かってしまったが、第四ゲームが開始した。

順番は、男、越智さん、馬場さん、の順番である。

一周目は、ダイヤの三、クラブの一、クラブの十。

誰もスタンドしないので二周目へ。

二周目は、スペードの八、ダイヤの一、ジョーカー。

ここで初めてのジョーカーが出た！ 手にしたのは馬場さんだ！ 馬場さんはジョーカーを保留にしてカードを引いた。ハートの一だ。

…………何故、ここで保留にするのだろうか？ そのままスタンドしておけば、もう少し簡単に抜けられただろうに。馬場さんはここで「

スタンド」と宣言した。当然だ、これでホールカードが十以上じゃなければ抜けられるのだから。

「……ジョーカーってホールカードをオープンしてから使ってもいいんですか？」

「構いませんよ。ジョーカーには道化師の絵柄が描かれていることが多いくらいですから遊び心は満載です」

「……何だかよく言っている意味がわからなかったが、別に構わないらしいからいいか。」

「じゃあホールカードをオープンしてから使います」

と、馬場さんが言ったので、全員、ホールカードをオープンした。結果、男はハートの九が出たので、合計、二十。越智さんはスペードの十三が出たので、合計、十五。馬場さんはまたしてもジョーカーが出たので、ジョーカーを使う前の合計は十一。

ここに来て、今まで出なかつたジョーカーが二枚とも出た。しかも馬場さんのところで。何という強運！これで馬場さんが抜けられるのは確実だから次のゲームからは男と越智さんの一対一の勝負か。越智さんは今回はバーストしなかつたけど、四回中三回はバーストしているわけだから少し不安だな。

「わたくし達はブラックジャック成らず、でしたね。後はあなただけですよ」

そう言うのと、男は馬場さんの方を見た。馬場さんは何やら少し考えている。何を考える必要があるのだろうか？ さつさと二十一になるようにしてしまえばいいのに。

「……私はホールカードのジョーカーを『十』として使います」

……しばらく考えた結果、馬場さんが出した結論は意外なものだった。ホールカードのジョーカーを『十』で使ってしまうと、その時点で二十一になる。そうなれば、保留してあるジョーカーを使うと、必然、二十一を超えてしまう。……馬場さんは何を考えているんだ？

「いいんですか？ そうすれば、保留してあるジョーカーを使う

と二十一を超えてしましますよ?」

男は俺と同じ考えを馬場さんに言った。男の言う通りだ。変えるなら今のうちだ。

「いや、いいんです。保留したジョーカーは『六』として扱い、越智さんに譲渡します。」

越智さんにジョーカーを譲渡する? そんなこと出来るわけがないだろう。ジョーカーの所有者は馬場さんだぞ。馬場さんは何を言っているんだ?

「……いやいや、何を言っているのですか。ジョーカーの所有者はあなたですよ? ジョーカーはちゃんとジョーカーの役割として使って頂かないと」

男は当然と言えば当然の反論をする。

「ええ、だから私はジョーカーの役割として使わせて頂いたまでですが」

「……どういうことですか?」

「あなたはジョーカーを使う際の禁止事項を『一から十三以外の数字にはなれない』といしか言っていない。そして、それ以外ならジョーカーの役割として存分に使っていていいと言いました。間違いありませんね?」

男は「ええ」と短く答えた。

「それなら簡単な話です。ジョーカーとは一般的には『切り札』としての意味合いで使われることが多いですが、もう一つ重要な意味があります。それが『代札』としての役割です。それはあなたも分かっているはずですよ? あなたが最初に『一から十三以外の数字にはなれない』という発言の裏を反せば『一から十三の数字にはなれる』ってことです。つまり、一から十三の数字に代替えできるということ。あなたは私達にこのことを気付かせるためのヒントをくれたのです。そして、それと同時にあなたは私達にもう一つの利点を気付かせないようにしたのです」

男は「……と言います」と、何食わぬ感じで答える。

「それは言うなれば『切り札』としてのジョーカーの使い方です。『切り札』とは最後の手段にして最高の一手をもたらししてくれる。そのことをあなたは最初に『代札』としてのジョーカーの使い方を強調することで、私達に『切り札』としての効力から遠ざけようとした」

「……………だとしたらどうだというのです?」

動じずに男が答える。

「だから私は越智さんに譲渡するという効力を使います。先程も言いましたが、あなたが禁止したのは『一から十三以外の数字にはなれない』だけであり、それ以外のジョーカーの役割として使っている、ということでした。その言葉から私は『代札』ではなく、『切り札』としてのジョーカーの役割を使い、譲渡という結論に至りました」

男はしばらく黙ったまま考え、「……………なるほど」と、言葉を漏らした。

「……………少々甘い気もしますが、及第点ですね。その申し出、認めましょう」

男は馬場さんの言い分を認めた。その結果、越智さんもブラックジャックになり、越智さん、馬場さん、二人とも抜けることが出来た。

「君たちがこんなに分かっている子だとは思いませんでしたよ。素晴らしい。このゲームわたくしの負けです。どうぞ、わたくしに出来る範囲でしたら叶えますので、何でも言っして下さい」

男が丁寧にお辞儀をしながら言った。俺たちは相談をし、満場一致の結論に至った。

「じゃあ俺たち全員の願いは一つ、ここから帰らせてくれ。ただそれだけだ」

金が願いを言うと、「……………それでいいんですか?」と、聞いて来たが、全員、すぐにコクリと頷いた。

「別にそんな願いを叶えなくともちゃんと帰しますよ?」

男は不思議そうに言ったが、金は「その言葉に確証はない。だからこれで確約してもらおう。それに俺たちに大層な願いなどないしな」
男は「そうですか。それならその願いを叶えましょう」
「君たちが入って来た扉の向かい側にある扉、あそこが出口に繋がっています。一本道なので迷う心配もないでしょう」
男は一つの扉を指差して言った。俺たちはその扉の方へ行き、その扉から出て行った。

九

男の言った通り、そこは一本道で迷うことなく、出口と思われる扉の前に着いた。その扉に俺たち個人個人に宛てられた一枚の紙が貼ってあった。

「何だ、これは？」

金がそう言つて、扉から紙を剥がし、俺たちもそれに続いた。するとどこからともなく先程の男の声が聞こえた。

「出口に着いたようですね」

男が言つと金は「これは何のつもりだ？」と聞いた。……周りを見渡すが、カメラやスピーカーらしき物はない。どうなっているんだろつと考えていると、男が話し始めた。

「それは先程教え忘れた君たちのタイプについて記してあります。どうぞ、御覧になって下さい。意味がわかりにくいかもしれないので、文の最後には先程やったトランプで例えとききましたので、参考にして下さい」

男が言つので、俺たちは一人一人自分に宛てられた紙に書いてあることを読み上げた。

「太田金様へ。あなたは順風満帆な生活を送れるでしょう。人の上に立つことに長けているので、将来的には起業し、自らが社長と

なり、掌握していくでしょう。キング」

「姫野玖院様へ。あなたは選択さえ間違えなければ、順風満帆な生活を送れるでしょう。あなた自身にも人の上に立つ資質はありますが、どちらかと言えば、同じく、人の上に立つ資質を持っている人をパートナーとして持つといいでしょう。クイーン」

「岸平氏様へ。あなたは人に遣えることに長けているというよりはそれしか出来ません。なので、一人で何かしようとは思わない方がいいでしょう。ジャック」

「南波一様へ。あなたは何をやってても上手くいくことでしょう。自分の才能を過小評価しないことです。エース」

「越智零様へ。あなたは何をやってても平凡。自分には何かあるとは思わずに慎ましく生きた方がいいでしょう。その他」

「馬場切代様へ。あなたはわかりません。あなたは何でも出来るし、何も出来ない。自分で考え、その通りに行動して下さい。決して周りに流されないように。ジョーカー」

全員が読み上げ終わった。……何だ、この占いみたいなものは？

「理解されましたかな？ それが君たちのタイプです。君たちの分かるように言うと、占いみたいなものですね」

どこにあるかわからないスピーカーから男の声がした。これに返事をするように金が言った。

「……これがお前が知りたかったことか？」

「そうです。君たちから見たら意味不明でしょうが、これは大切なことであり、また、運命なのですよ」

俺たちは「運命？」と聞き返した。

「はい。人は生まれながらにしてある宿命を背負わされる。それがそのタイプというやつです。君たちは全員同じ学校の同じクラスですから、君たちを例で言いますと、太田君、姫野さんが引つ張り、それに岸君が付いて行く。南波君は誰もが頼る天才であり、越智さんが平凡な女の子。転校して来たばかりの馬場さんは未知なる存在で誰にも予測がつかない、といった感じですよ」

俺たちは絶句してしまった。それは全員が男が言ったことに心当たりがあるというだけではなく、男が何故そこまで俺たちのことを熟知しているのかがわからなかったからだ。何故なら、この紙が書かれたのは恐らく俺たちと男が直接対面する前。つまり、ほとんど初対面のうちに俺たちの特性をこの男は見抜いたことになる。ここに誘拐する前にそれなりに俺たちを調べることが出来ただろうが、一緒に生活していない限りはわからないようなこともこの男は知っていた。もちろん、俺たちの誰もこの男は全く見覚えのない奴だ。

「……この紙、いつ書いた？」

金が誰もが疑問に思っているだろうことを聞いた。

「これは君たちを攫って来て、すぐ書きましたよ。それくらいしか書く時間ありませんでしたからね」

男は俺たちが薄々勘付いていた答えを言った。まだこの紙が俺たちとゲームをした後に書かれたなら百歩譲って理解出来るけど、そうではないのだ。やはり理解出来ない。本当にあの男にはタイプというやつが分かるのか？

「わたくしが伝えたかったことは以上です。どうぞ、気をつけてお帰り下さい」

男が言った。すると、金が「最後に一つ」と言い、男が「何でしよう？」と返した。

「お前は何者だ？」

「……そうですね。わたくしは世の理を見て、伝える者ってところでしょうか」

と、最後までわけのわからないことを言った。金が「……そうか」と言い、俺たちはその場所を後にした。

出口から外に出ると、そこは俺たちの家からそう遠くない裏山だった。俺たちはこんな近くだったのかと驚きつつも全員で家に向かって歩き始めた。

「結局、何だったんだろうね」

玖院がそう話を切り出すと、金が「さあな」と返事をした。

「分かることは、あの男が言っただことは的外れではないってことだよな」

金が言うと、南波君が答える。

「そうだね。人は生まれながらにして宿命を背負っている、理解出来ない話ではなかったね。だけど、納得は出来ない」

玖院が「どうして？」と聞く。

「だって、さっき言ったことが全て真実であつたとしたら、岸君と越智さんの結果はひどい気がするんだ。だから、確かに宿命はあるかもしれないけど、それを打ち破る力がある人にはあるって思いたいんだ」

南波君は本当に出来た人だ。自分の結果はとても良い結果だったにも関わらず、喜ばないで、良くない結果だった俺や越智さんのことを案じてくれる。本当、南波君は良い人だ。

その言葉を聞いた俺と越智さんは同時に「ありがとう」と言った。そうしたら、南波君が照れ臭そうに笑ってくれて、どこか張り詰めていた空気が一瞬にして緩んだ。

「みんな、馬場さんみたいなジョーカーになれたらいいね。何にでもなれる可能性が秘めてるから希望があるじゃん」

馬場さんも「そうね、それがあある意味一番幸せかもね」と笑顔で言った。

「本当、あの男の人は何がしたいのかはわからないけど、あの人のおかげで考え方が少し変わったよな」

そう言った馬場さんに玖院が「でも、怖くなかった？」と聞いた。「確かに怖かったけど、それ以上に大切なことを教わった気がする。だって、あの人が言ったことは決して間違いじゃないし、大人になれば誰もが気付くと思うの、自分の役割つてものに。でも、それは学校の先生や塾の先生、親ですら教えてくれないことだよ。それを教えてくれたんだから私はあの人に感謝したいな」

馬場さんが嬉しそうに言うと、玖院が「そうね」と言った。

「確かに大人になってからこのことに気付いたんじゃない今みたいに

自分の宿命を変えてやる、なんて言わないだろうしね。……大人になるって難しいな」

「それでも俺たちは大人になってく。どんな大人になるかはこれからの俺たち次第だがな。あの男が言った通り、自分の役割を真っ当するか、それとも、宿命とやらを打ち破るか、……どうなることやら」

金と玖院はやはり中学生離れした考えを述べた。どれに対して俺は一つの疑問を聞いた。

「今回のこと警察に通報する？」

金は「いや、いいだろ」と言った。

「俺にはあの男が悪い奴には見えないし、それはお前達も一緒だろう？ それに、今後も今回の俺たちみたいに他の子供達にも大人になるまでに大事なことを気付かせてあげたいと思うんだ」

金のこの意見に誰も反論しなかった。そう、これはこのままにしておこう。未だ行方不明の子もいるらしいが、そのうち見つかるだろうと、そんな楽観的な考えを持っていた。そして、全員が家に帰る間、自分の在り方と失踪の言い訳を考えていた。

〇〇

人には様々なタイプがある。それを受け入れるのもいいが、宿命を打ち破って他のタイプになるという選択もいいだろう。それは本文にあったトランプに例えて言うと、誰にでも頼られるエースになりたい人もいれば、ジャックのように誰かに遣えるという形で生きたいという人もいるだろう。または、キングやクイーンのように人の上に立ちたい人もいるだろう。もしかしたら、その他で、平凡に暮らしたいという人もいるだろう。こういって様々なタイプの人が存在すると思う。だが、私が一番なって欲しいと思うものがある。

それは、誰もが何にでもなれる可能性を秘めているもの。ジョーカ
ーのようになつて欲しいと思う。

了

(後書き)

読んで下さりましてありがとうございます。これは短編小説のもりで書いたのですが、ご要望がありましたら続編を書かせて頂きますので、何なりとお申し付け下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0969x/>

宿命を背負いし者

2011年10月9日14時51分発行